

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

大学の韓国語教育と「2002年ソウルスタイル」展

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金, 美善 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00001873 |

大学の韓国語教育と「2002年ソウルスタイル」展

金 美善

1 はじめに

2000年代に入って外国語科目として韓国語を導入する大学が増えている。各大学においてアジア言語を受容する態度が変化し、韓国との政治的、経済的關係が強調されるようになり、韓国語の位相が変化したことなどが、韓国語の導入に影響したのは改めて説明する必要がないであろう。2002年は各大学での韓国語の受講者が例年に比べて急増した特別な年でもあった。日韓ワールドカップ共催により韓国語の受講者が例年の倍になったためである。「ワールドカップが開催される年は開催国の言語の受講者が急増する」といった大学関係機関の経験的断言は2002年の韓国語にも的中した。筆者が担当する大学の韓国語クラスでも、受講者が増え、教室を変更するなどのことがあった。時を同じくして、国立民族学博物館で特別展示「2002ソウルスタイル」（以下特展とする）が行われた。これは韓国に対する関心が社会全体に高まった雰囲気の中で観覧者に、個別の、具体的な対象を明解に提示した、言葉通りの「特別展示」であった。従来とは異なる観点で韓国を知らせる展示の内容は、展示が終わってからも高く評価されている。一般観覧者のみならず学校教育においても教育の材料として有益であった¹⁾。

大学で韓国語教育を担当している筆者の授業でも特展を通して期待以上の教育的効果をあげることができた。筆者が担当する語学関係（韓国語、対照言語学）の授業を受講する学生にとって言語と密接な関係にある生活文化を知るよい機会になり、韓国語への関心を向上させるいい刺激材料にもなった。このような教育効果は、展示を観覧した後提出させた学生のレポートの内容からも確認できるが、実際に、特展の教育的効果は期待以上のことであった。物事を繊細に感じる観察力は、こちらでは意図できなかった様々な観点に及ぶもので、独自の文化を受容する枠を構築する媒体として、特展を活用していたのであった。この点、在日韓国朝鮮人が多く居住する大阪で展示が開催されたことも大きな意味をもつ。日本人学生とは別のもう一つの視点をもつ在日韓国朝鮮人の学生にとって、特展はもう一つの異なる機能を果たしていたのである。

以下では、2002年度に、筆者の語学関係の授業を受講した学生が提出したレポートの内容を示すことによって大学の韓国語教育に活用された特展の教育効果について紹介したい。

2 大学での韓国語²⁾ 教育と特展の役割

2.1 韓国語教育の役割

授業形態は大学によって方針が異なるとはいえ、必修選択あるいは選択科目の場合、一般的に、指定されたテキストをとおして、発音・文法・語彙などを中心に説明し進行することに大差はない。筆者は大阪周辺の三つの大学³⁾で韓国語（初級、中級）と対照言語学の講義を担当しているが、筆者の場合もほとんど同じである。シラバスで確認できるように、授業の内容、進み具合はすでに決まっているが、筆者は毎年授業が始まる最初の時間には、受講者にこれからの授業内容について簡単に説明をし、次の三つの質問をする。

- 1) 韓国語を選択した理由
- 2) 韓国・韓国語について知っていること
- 3) 韓国語の授業を通して達成したい目標

これらの質問は韓国語の授業に対する学生のニーズを把握し、学生の意向を授業内容に反映するためのものである。これらの質問に対する学生の答えは、どの大学でもほぼ同じである。まず、「韓国語を選択した理由」として答えた内容を数の多い順に示すと、日本語とは文法が似ているから単位をとりやすそうだという「実利型」、その次が、日本と一番近い国である韓国について知りたいという「好奇心型」、その次が、特に理由はないという「無関心型」に類型化できる。二つ目の、「韓国・韓国語について知っていること」に関する質問では、「キムチ」、「ビビンパ」など、すでに日本に伝わっている食文化に関する答えが一番多く、その次は、時事に関する内容であるが、朝鮮半島の状況や IT 先進国など日本のメディアでよく話題になっている事柄を答える何人かの学生を除くと、多くの学生が「知らない」と答えている。日本の大学生の韓国及び韓国語についての知識が多少偏っていることを感じさせられる。しかし、三つ目の「韓国語の授業を通して達成したい目標」の質問に対する答えは、他の答えに比べて具体的で多様な様相を見せている。「ハングルを読みたい」、「韓国文化が知りたい」、「K-pop の歌詞が知りたい」、「韓国に行ったときに韓国語で買い物がしたい」など、韓国語の授業を通して韓国語のみならず、韓国の文化に接しようとする意見が意外に多いことに改めて気が付く。韓国に対する知識の量よりは韓国についての関心が高く、単位をとるといった実利的な目的とともに、韓国に対する好奇心を韓国語の授業を通して解消しようとする傾向が強い。これは、韓国語の授業が、学生にとって韓国の全般的な内容を知らせる窓口の役割として期待されていることを意味する。学生にとって知識の窓口になる教師には、語学以外の知識が要求されることでもあり、これらの点から、大学の韓国語の授業は、語学の教科書

を中心とする授業だけでは十分に効果をあげることができない多くの課題を抱えているといえる。

2.2 教師を通じた韓国観の形成

筆者の場合、毎回の授業の10分程度を、新聞雑誌の記事などを使って最近の話題や異文化の行動様式などの紹介にあてている。このような言語以外の話題は、学生に多くの関心を持たせるきっかけになるものでもある。音声や意味の恣意性を、反復を通して暗記しなければならない語学の授業は、学生に倦怠感を感じさせる恐れがあり、単位をとることだけが目的である学生には重い負担になる場合もある。言語以外の話題に学生が関心を持つのは、このような語学の授業の負担を、文化的情報が和らげるためであろう。また多くの教師が、教科書以外の教材を通して、韓国に対する言語以外の情報を提供しているが、映画やドラマなどの映像資料を導入したり、新聞や雑誌などの活字資料を導入したりする場合もある。

学生はこのような授業を通して独自の韓国観を形成していく。しかし、筆者が担当している大学の場合、語学科目以外に韓国を知るきっかけになる科目の提供がなく、韓国文化の伝達提供の全般的な部分が語学の授業に期待されている点、学生は、韓国語科目や教師を通して韓国観を形成していくと言っても過言ではない。特に、筆者のようなネイティブ韓国人の場合は期待感が倍増するが、実際にネイティブの自文化伝達能力に対する一般的解釈と過大な期待はステレオタイプの発想であることもあまり意識されないところである。

授業がある程度進むと、学生は言語以外の事柄に好奇心を具体化させる。筆者は毎回の授業が終わる頃に質問時間を設けているが、学生から出てくる質問の内容も、授業と関連する語学に関する質問だけではなく韓国の文化、時事一般に及ぶものにまで質問の範囲が広がる。質問の内容が、教師が対応できる知識の範囲であれば当然情報の伝達が円滑に行われるが、教師の知識の範囲を超える質問である場合、どうしても教師の視点が介入する。また、時には教師の個人的解釈や偏った情報が、学生に一般化され処理される場合もあり、これが検証できずに事実として認識されてしまう恐れもある。韓国語を受講する学生にとって、教師は韓国の文化に接する初めての機会を与える提供者であり、韓国観を形成する経路でもある。教師が学生に与える影響は少なくないのである。

2.3 特展の副教材化

語学の授業でありながら、学生が教師に要求する情報は語学以外の部分に関するものも多くを占めることは前述の通りである。しかし、学生の多様な要求に対する制度的準備がない語学の授業では、なんらかの副教材が必要となる。教科書のみでの授業では学生のニーズに答えきれないのである。副教材として選ばれやすい資料としては、各種出版

物、映像資料及び写真などの様々なものがあるが、筆者はちょうど大学での授業が始まる時期に行われた民博の特展を副教材にした。その理由はまず、多角的に韓国を知る上で展示内容が充実していること、移動しやすい距離に展示場があること、他の博物館展示とは違い体験展示であること、その他、食文化を含め、いろいろイベントが楽しめる点など複数あるが、なによりも、展示の内容が現代の韓国的一面を、価値判断のフィルターを通さずありのまま展示したものであるからであった。

どのようにして特展を副教材として使用したかについては次の通りである。まず、授業中に特展のチラシを配布して展示の内容を簡略で紹介しながら特展の存在と趣旨を知らせたが、すでにメディアを通して特展の存在を知っている学生も多かった。そして、展示を観覧すること、レポートを作成して提出することで単位取得のためのレポートの点数が反映されるようにした。レポートは展示内容の概略を記述した後、展示に関して感じたことを評価的観点と批判的観点から作成するようにした。これは展示の観覧とレポートの作成があくまでも授業の一部であることを学生に意識させるためであると同時に対象を包括的に認識させるためであった。レポートの分量は400原稿用紙4枚程度とし、提出の締め切りを前期試験が終わる7月末に設定した。事情があつて展示を観覧できなかった一部の学生を除いて約240部のレポートが提出された。

3 レポートから得られた特展の教育効果

240部にも及ぶレポートの内容を、数的に分析して学生の意見を全体的に把握することも可能であろうが、部分的ではあるが、学生の視点をありのまま紹介するのが筆者の意図であるので、ここでは個別的内容をそのまま紹介することにした。したがって、以下に紹介する内容はレポートを提出した学生全員の意見を全部反映したものではないことを断っておく。全員の意見を反映させた報告に関しては後日別の機会に紹介することにする。以下では、レポートの内容を例示しながら内容を紹介する。明らかな間違いがない限り、学生が書いた原文をそのまま載せる。なお、レポート提出者の個人的属性は省略する。

3.1 観点

まず、学生が韓国をどのように観察しているかについて述べてみよう。多くの学生が韓国は日本とは異なるだろうという思い込みを前提に展示を観察している。日本と韓国との生活様式とは違いが大きいと思っていたが、特展に行ってみたら、実際にはあまり差がなかったと、似ていることを意外に思っている内容が多かった。このことから、特展は「韓国と日本は異なる」といった前提が先入観であったことを学生に認識させ、多様な解釈を促す材料となったといえる。

- 1) 日本と韓国はあまり違ってないことが分かった。アボジ（お父さん）、オモニ（お母さん）の生活、子どもの生活が日本とほとんど変わらないことが分かった。
- 2) 韓国の住居の中に一步踏み入れてみると、その住まいの表情はずいぶん異なっている。そして、こうした発見が異文化理解や国際理解の第一歩につながるのだと思います。

日本と韓国は似ている部分（異なっていない部分）が多いことを受容した後、個別的な部分において、日本との相違点を探していこうとする様子が読み取れる。2)の「発見」という表現は、両国の生活文化の類似性を象徴している。

レポートを提出した学生の90%以上が家族写真について言及しているが、これもやはり、両国の類似した生活文化のなかの相違点を指摘したもので印象深い。また、写真の数が家族思いの強さを表すバロメーターになると考えている学生が多かったことも興味深い。

- 3) 部屋のいたるところに家族写真が飾ってあることを見て驚いた。この点は日本とは違うと感じた。韓国人の家族に対する思いは日本とは違うと思った。韓国人は日本人より家族を重視するように思った。

展示を見る学生の視点は様々であるが、以下のように、展示を通じて韓国を客観化していく様子もみえる。

- 4) この展示を見終わって、私はなんとも説明しがたい気持ちに追われた。少なくとも今までの韓国のイメージは変わってしまった。以前は日本と似ているところはあるが、きっと独自の文化のほうが強いだらうと思っていた。しかし、展示をみた限りではそれは古いとわれ方だと気がついた。最終的に私が感じた、今の韓国人たちの暮らしは、三つのミックスを持ったものだということだ。ひとつは、韓国独自の伝統文化で、日本とは違う、お香のような匂いや鮮やかな色合い、キムチ、金属の箸などの食生活にもうかがえる。もうひとつは、先進国の一員である、西洋文化の影響だ。高層マンション、ウィジョンが通う学校のコンピュータ設備など、また、若者のファッションや、g.o.dの音楽などは、日本やそのほかの先進国に見られる傾向と変わらない。そして、最後のひとつは、西洋の先進国にはない、アジアにある韓国と日本に見られる共通性である。お箸、ご飯、布団、学校のつくりなど、数え上げたらきりが無い。その比重は多分、どれも均等であると思う。

単に、韓国の文化を日本の文化と比較して、相違点と類似点を取り出そうとする展示観覧のパターンから一歩進んで、韓国の文化を類型化して整理・解釈していく様子が読み

取れる。韓国固有の個別的な文化的特徴，世界全体が先進国型に共通化していく過程にある，現代韓国の変化した様子，アジアという同一の文化圏で感じる，日本との共有意識などを，この展示を通して敏感に感じ取っているのである。これらは展示を見てから変ったイメージとしてまとめられている。確かに，展示の究極の目的は展示を見る前と見た後の観覧者の何らかの意識（あるいは知識）の変化を狙うものであると筆者は認識しているが，実際，多くの学生が展示を観覧する前後の韓国に対する意識の変化について言及している。

3.2 変化

教科書を中心とする教室での授業では知識の量や質の変化は期待できるが，韓国に対する意識の変化までを期待するのは難しい。特展を観覧した多くの学生に韓国に関するこれまでの考え方に変化が見られた。何より親近感の変化に注目したい。

- 5) 私はただ韓国に旅行に行つて，おいしい韓国料理を食べて，買い物かしたいという理由で朝鮮語の授業をとったわけですが，今はこのソウルスタイルに行つてからというもの，旅行のためとかじゃなく韓国の文化にもっと触れ韓国のことを知るために朝鮮語を学びたいと思うようになりました。
- 6) 正直，はっきり申し上げたい！私はソウルスタイルに行きなさい，ということを書いて「めんどくさい・・・。」と思つてしまつたし，単位のため渋々な遠出だつた。だが，期待してなかつたからかもしれないが，結構楽しめた。気心の知れた仲間といったかも知れないが，休日の一日を十分に満喫できた。韓国というものを身近に感じるようになった，といったら言い過ぎかもしれないが，少なくとも私の興味を韓国にひきつけるきっかけにはなつた。会話できるようになりたい！これが今の私にある率直な欲求である。英語を習つた時もフランス語を習つた時も感じたことのない知的好奇心，欲求である。一緒に行つた仲間内では，ちょっとした韓国語による挨拶をしている始末。メールにも，全然韓国語を知らない友人相手に，コリアンフレーズを導入してしまつている。こんにちは，さよなら，おやすみ，いただきます，おいしい・・・といった日常的に使用するものはもうバリバリ使つている。近い将来，韓国に旅行したい！そう思つている今日この頃である。
- 7) 韓国って面白い国だなと改めて思いました。飲食のコーナーで食べたタッカルビもチャブサルドーナツもおいしかったし，いつか旅行に行きたいです。そして，この前在日韓国人作家の金城一紀さんが書いた『GO』⁴⁾ という本を読んで映画もみてとても感動したので「在日」ということについても考えて行きたいです。

これらの内容には、展示を観覧する前と後での意識の変化がよく現れている。5) のように、旅行または買い物をするために韓国語を選択したが、展示を観覧してからは韓国にもっと触れる機会を作り、韓国を知るために韓国語を学びたいと思っている例、6) のように単位をとるために展示を観覧したが、観覧後に韓国に対する知的好奇心が増し、その後に韓国語を積極的に使うきっかけになった例、7) のように韓国の食べ物に対する単純な体験から在日韓国朝鮮人に対してまで関心の領域が拡大した例など、きっかけと内容は異なるが、展示を通じて、韓国に対する意識が発展的で積極的になってきている。教科書中心の教室での授業ではなかなか得ることが出来ない教育的効果であるといえよう。

3.3 実感

特展のもうひとつの特徴は、観覧者の居住空間の中で実際に韓国のイメージが実感できたことである。観覧者の文化空間内で、他の文化を実際に体験する機会がめったにないことは展示を観覧した学生も意識しているようだった。

- 8) この民族学博物館で本場に近い韓国の文化暮らしに触れることができて本当によかった。もしかすると本場でここまで韓国の人々の暮らしに隅々まで触れることはできないかもしれない。実を言えば、写真をとったのだが冷蔵庫、風呂場まで写真に収めてしまったのだ。なんといっても食文化も重要な文化の一つであるのだから。本当にソウルスタイルを見学できて楽しかったし、新たな好奇心が芽生えた。

学生の多くが個人の私生活をここまで見せることができるだろうかといった驚きとともに、展示品に直接触れて、感じるができる展示方法について高い関心を示していた。筆者の個人的な考えでも、視覚的側面を重視する従来 of 博物館の展示形態をやめ、見て、触れて、聞いて、感じるができる多角的展示を試みたことは十分評価されるべきことだと思う。前もって、見て、触れて、味わう展示であることを説明し、積極的に体験することをすすめたためであろうか、食べ物や民族衣装の試着などの体験はもちろん、ダンスの中身、子ども部屋の本を見たりしているんな生活の中身を実感した学生が多かった。なかでも冷蔵庫に関する体験が強烈に印象付けられたようだ。

- 9) 冷蔵庫をあけたら本当に電源が入っていて、キムチのにおいが漂ってくるような展示会に行ったのは初めてでした。その点は非常に衝撃を受けました。普通、他国の日常生活を知ることとはその国を訪れなければわからないと思います。
- 10) 先生がおっしゃっていた冷蔵庫が気になったのであけて中を確認してみると、本当に汚かったのでびっくりしました。ありのまますぎて驚いたのもありますが、もしかしたら私の家の冷蔵庫より汚いです！においがたまりませんでした。

冷蔵庫に対する強烈な展示体験をそのまま表現したのが面白い。9) のように、特別な展示であったことを、冷蔵庫を通して感じた学生もおり、10) のように、冷蔵庫のにおいを露骨に表現した学生もいた。授業中に、冷蔵庫を開けてみると韓国のおおいを感じることができるかと予備知識を与えたことに、多くの学生が反応を見せてくれた。韓国人である筆者が普段なんの違和感もなくあけている冷蔵庫のおおいが、日本の学生達には、たまらない韓国のおいとして感じるのだろうか。冷蔵庫を通しての文化の実感はいろんな面で意味のある作業だった。韓国のおおいを経験することによって日本のおおいを客観化することが可能だからである。日本はおおいがない国だと筆者が韓国の文化を背景に認識していく過程と似ているような気がした。「冷蔵庫」は韓国を実感して日本を実感する、よい比較の道具になったに違いない。

3.4 もうひとつの視覚

今回の展示は、在日韓国朝鮮人が一番多く居住している大阪で行われたことも意味があった。今回の展示について多くの在日韓国朝鮮人が日本人とは異なる観点で興味をもって観覧したに違いない。筆者の授業にも在日韓国朝鮮人の学生⁵⁾が参加しており、特展が彼らになにかを感じさせるきっかけになった。在日韓国朝鮮人の社会では、近年、彼らのアイデンティティに関する問題がしきりに論じられている。特に、祖国生まれの1世から日本生まれの2世以降の世代へと世代交代が進んでいる現在の在日社会において、祖国の文化的刺激と民族教育を経験せず成長した若い世代のアイデンティティに関しては複雑な問題が絡み合っている。

- 11) 僕は在日韓国人である。それを知らされたのは小学校6年生の時、それまでは自分は当たり前のように日本人だと思っていた。しかし、そのことを知らされたからといって、それ以降の自分の生活スタイルに変化が訪れたということはない。はじめはみんなと違うということで誰かに話したくて仕方がなかったのだが、中学・高校と進むにつれて自分に韓国の血が流れていることをひた隠しにするようになった。それもつい最近までである。それがなぜなのか、自分でも明確にはわかっていないが、そもそも原因のひとつとして「韓国人を意識さ

せる教育がされていなかった」というのがあるように思える。

このレポートを提出した学生は、自分の失われたアイデンティティとそれを取り巻く葛藤の原因のひとつとして自身が韓国人であることを意識できるような教育の不在を挙げています。在日韓国朝鮮人コミュニティの現状を明確に指摘したものであるといえる。

実際に、私達の日常で彼らが民族を感じられる媒体はそれほど多くない。世代交代が進んだ家庭ではすでに民族教育が期待できるような機能はもう果たせないのが現状であり、学校教育の面でも同じようなことがいえる。日本政府の民族教育に関するこれまでの歴史的経緯を考えても、在日韓国朝鮮人の若い世代が民族を感じる場はほとんどないといっても過言ではない。上記の学生の問題は、一個人の問題ではなく、在日韓国朝鮮人の若い世代のほとんどが抱えている問題でもある。このような在日韓国朝鮮人の現状を考えると、今回の特展が彼らに与えた影響は少なくない。

- 12) 私の祖父母は韓国から日本に渡ってきたので、私はいわゆる在日韓国人3世だ。が、私の名前は日本名、言語も生活スタイルも日本らしく暮らしてきたので、普段はそれを意識することはめったにない。むしろ、その立場をあいまいにさせる在日韓国人という事実は、認めてはいるもののわずらわしくて、今まで自分から進んでは祖国のことを知ろうとはしなかった。今年、朝鮮語の授業を選択したのも、必要単位というだけの理由からだった。今まで、「在日韓国人」ということで、私は日本と韓国を必要以上に別個のものとして考えてきたのだ。しかし、今回「ソウルスタイル」を見て、その考えが少し改められた気がした。確かにそれぞれの細かい文化は違うが、両国は、生活スタイルについては特に、こんなに近くてこんなに似ているんだと思えた。李さんの家のアボジは「お互い共通した部分が多いから理解しやすいはず」といつていたがその通りだった。こんなに似ている国に、祖国としてか、自分の暮らす国の隣国としてかはわからないが、親しみを持たせてくれたこの特別展示は私にとって有意義なものとなった。

上の学生は自分の今までの祖国に対する無関心をのべ、韓国と日本を必要以上に個別のものとして考えてきたことについて触れている。この別個のものとして意識していることに、筆者は多くの意味が含まれていると考えている。在日韓国朝鮮人の感じる韓国と、日本の学生が感じる韓国とは本質的に異なるものであることに注意しなければならない。いわゆる最近の若者である日本の学生にとって韓国は異なる社会、文化をもつ別個の国として韓国を意識する場合が多いが、同世代でも在日韓国朝鮮人の学生の場合は、それ以外に祖国である韓国と生活の場である日本との間に優劣が存在するといった意識が付加されていることである。優劣の差が生じる理由は、在日韓国朝鮮人の歴史と日本社会の在日韓国朝鮮人に対する偏見や政策による現在の立場を考えると他に説明はいら

ないであろう。このような面において、今回の展示は、在日韓国朝鮮人の若い世代にとって、韓国を渡航世代の記憶に残る前近代的な「朝鮮」でもなく、また、イデオロギー化された祖国でもない、2002年の日本とあまり変りのない祖国として再認識するよい材料になったことに大きな意味があると認識している。まだ迷いはあるが、特展が祖国に親しみを持たせてくれた事実には、以下のような韓国系日本人にも同じ解釈が可能である。

- 13) 僕は、元在日韓国人ですが、4世ということもあり、そしてずっと日本の学校に通っていたので、あまり韓国の文化、生活にいたるまでよく知りませんでした。しかし、やはりそこには、他の人たちと違い、ただの外国とは思えず、今回のこの特別展においても非常に興味を持っていました。——中略——今回の貴重な経験を僕と韓国の間でいろいろ役立たせていきたいなと思います。

3.5 問題点はなかったのか

学生に、レポートを作成する際には本展示に関する評価的観点と批判的観点を併記することを強調したが、批判的意見を出すことにはそれほど積極的ではなかった。これは、批判的意見がなかったことを意味するというより、批判することを避けようとしている若い世代の新風潮だと判断できよう。以下、一部ではあるが、問題点を扱った意見を紹介する。

- 14) 李さん一家はおそらく裕福な家庭だと思うのですが、いわゆる低所得層の人々の暮らしぶりを知ることができればよかったと思います。日本の大学生の立場からいうと、ソウルの大学生（若者）の生活をもっと知りたかったです。
- 15) 李さん一家は、韓国の、それも首都ソウルのある一家庭である、ということをもう少し、強調するべきだ。田舎と都会はぜんぜん違うだろうし、都市によってもちがう、また所得、生活レベルによっても大きく変わってくると思う。——中略——隅っこの方にも、このような暮らしをしている人はどれぐらいで、また他にはどんな生活をしている人がいる、といった説明がほしい。
- 16) 地下には市場があると見に行ったら、韓国に関係するカップ麺とかいろいろ紹介されていてよかったけど、思ったより売っている韓国料理の種類が少なくて、残念だった。本格的なビビンパやクッパが食べてみたかった。

全体的に、14)、15)のような意見が多かった。つまり、今回の展示に紹介されたように現在のソウルに住んでいるすべての人たちが、李さん一家のような生活をしているか

という疑問である。これは展示のタイトルである「ソウルスタイル」という名称にも、このような疑問を提供する要素があったように思える。「スタイル」といった用語が観覧者に「大多数に共通的に見られる生活パターン」といった意味として解釈、認識されたようだ。

学生が中流と低所得層、田舎生活者と都会生活者など個別的生活のレベルの中において李さん一家の占める位置に関心を持っていることは、韓国の全体像に対する関心を示していることでもある。もちろん、全体像を知ろうとしているのは、李さん一家の生活のレベルが全体を代表することではないことも把握しているからであろう。個別的对象が全体の中に占める位置を知ろうとする意見は、展示を客観的に判断しようとする学生達の鋭い注文でもある。統計資料などを使い、韓国の全体像を提供しておいたら、展示の観覧者にもっと客観的に韓国を知らせるのに効果があったのではないと思われる。

16) のように韓国の食文化を体験しようとした人たちに、今回の展示は期待できるような情報を十分に提供できなかったことについて何人かの意見があった。授業がない平日に展示を観覧した学生には、平日には食べ物を体験できなくて残念だったとの声もあった。思いのほか学生が食文化に関心が高いことを感じさせてくれた。筆者の推測ではあるが、今回の展示資料がすべて実際に使用されているというオリジナルのものである心理が食べ物にまで期待されていたかもしれない。展示場では、李さん一家が普段食べているオリジナルソウルの食べ物が体験できるといった期待感をもたれても当然なのかもしれない。16) の本格的なビビンパとクッパとは、日本のレストランでは味わえない韓国でのみ味わえるオリジナルを意味するものと思われる。食べ物まで徹底してソウルスタイルであってもよかったかもしれない。いずれにせよ、このように指摘された問題点及び意見はすべて、今後のこのような展示企画に貴重な意見であると考えられる。

4 終わりに

以上、今回の特展が大学の韓国語教育にもたらした教育的効果について、展示を観覧した学生達のレポートを中心に紹介することで整理してみた。大学の語学の授業においては、学生達と教師の心的距離は近く設定すべきだと思っている。教師は、時には語学のみならず対象言語についての地理的、社会的特徴、その地域に生活する人々の伝統と現代を伝える窓口の役割も担当しなければならない。韓国は日本と一番近い隣国であるのにも関わらず、日本の若者に韓国を知らせる媒体はあまり多様ではない。最近はずいぶんメディアを通して韓国の大衆文化が紹介されてはいるが、両国の交流の歴史を考えると決して十分だとはいえない。また、メディアで紹介される場合、その商業性によって一面的にとりあげられたり、事実が歪曲されたりもする。これに対して、今回の特展は現代の韓国を知らせることだけではなく、対象をありのまま提示し、すべての判断を

観覧者に任せたことに多くの教育的価値を見出すことが出来る。教育は、教えることであるよりは感じさせることだと認識している。今回の特展が大学で韓国語を学習している学生に多くのことを感じさせた有益な教材であったことは言うまでもない。この点に関しては、展示を観覧した学生の、韓国に対する親近感の変化と好奇心などが韓国語の授業につながる結果をもたらしたことから確認できる。また、在日韓国朝鮮人の学生たちには日本人の学生とは違った観点で韓国と韓国語を感じさせる機会になったことに大きな意味を持つものである。

ものごとを繊細に観察し、生産的に活用している学生の姿勢からは筆者も多くのことを学んだ。多くの学生が文化交流のため、プライベートなものまでを資料として全面的に提供した李さん一家の思いをも読み取っていたことが、レポートの内容から分かった。李さん一家の積極的な姿勢も立派な展示要素であったことを全ての学生が気付いていること、これも大きな教育効果であったといえよう。

注

- 1) 2002年から実施された総合教育の一環として、多くの学校が、2002年ソウルスタイルを教育の資料として導入していた。特に、多文化共生の概念作りが始まる小学生には、韓国を知らせるよい資料となった。例えば、豊中市立大池小学校では、展示を観覧した後、生徒達に研究発表させた内容を公開し参観日に親達に生徒の多文化受容に対する意識を実感させた。生徒が編集する学校新聞にも、韓国を紹介する展示内容が詳しく載っており、小学生の目線のみた韓国の一面がよく紹介されていた。同校4年3組(担任川越淳子)では、クラスの韓国人生徒に韓国語の挨拶を紹介してもらい授業の前と後の挨拶を日本語と韓国語併用にしたことなど、特展が生徒達に多文化共生と肯定的な韓国観を形成するのに役に立った例もあった。
- 2) 日本では朝鮮半島で使用されている言語に対して、大学においては朝鮮語という名称が一般的である。筆者が担当する大学での科目名も朝鮮語であるが、本稿では便宜上韓国語としている。
- 3) 関西大学、関西学院大学、神戸松蔭女子学院大学。
- 4) 在日韓国人作家金城一紀が書いた在日韓国青年のアイデンティティの葛藤と模索を新しい観点から扱ったもの。2000年講談社から出版。窪塚という俳優が主演をした映画としても有名。
- 5) 実際に、本名を名乗らない限りクラスで在日韓国朝鮮人学生の把握は難しい。筆者が言及しているのは、本名を名乗った学生と、彼らに自身を在日だと打ち明けられた場合である。彼らに関しては同質的な連帯感と親近感を感じてはいるが、今回の特展が彼らに民族的な部分を強調するために紹介されてはいない。この点は韓国語の授業も同じことがいえる。

대학의 한국어 교육과 「2002년 서울 스타일」 전

김 미선

1 들어가기

2000 년대에 들어 일본의 대학에서는 외국어 과목으로 한국어를 도입하는 대학이 늘고 있다. 대학들의 아시아 언어에 대한 수용태도의 변화, 한국과의 정치적 경제적 관계로 인한 위상의 변화 등이 많은 작용을 하였음은 달리 설명을 요하지 않겠으나 2002 년은 각 대학에 있어서 한국어 수강자가 예년의 상승율을 급변시키던 특별한 해였다. 한일 월드컵의 공동개최로 수강자가 예년의 배로 증가한 것이다. 월드컵이 개최되는 해는 개최국 언어의 인기가 급증한다는 각 대학 외국어 관계기관의 경험적 단언이 2002 년 한국어에도 그대로 적용했다고 할 수 있겠다. 필자가 담당하는 대학에서도 한국어를 수강하는 학생 수가 늘어 교실을 변경하는 등 미처 예비치 못했던 사태가 빚어지기도 했다. 때를 같이하여 행해진 국립 민족학 박물관의 특별전시 “2002년 서울 스타일 (이하 특전)” 은 한국에 대한 관심이 사회 전반에 고조된 분위기에 관람자들에게 구체적인 대상을 개별적으로 명쾌하게 제시해 준 이름 그대로 특별한 전시였다는 점에서 전시가 끝난 후에도 높이 평가되고 있다. 일반 관람자 뿐만 아니라 각 학교의 교육 자료로도 특전이 유용하게 사용되었다는 이야기를 듣는다¹⁾.

대학에서 한국어 교육을 담당하고 있는 필자의 수업에서도 특별 전시를 통해 기대했던 이상의 교육적 효과를 보았다. 필자가 담당하는 대학의 언어 관계 (한국어, 대조언어학) 수업을 수강하는 학생들에게 유익한 전시였다는 점은 전시를 관람한 학생들의 리포트의 내용에서 증명되고 있다. 실제로 학생들에게 있어서의 교육적 효과는 기대 이상이었다. 의도하지 않았던 부분까지 섬세히 느끼고 나름대로의 문화 수용의 틀을 구축하는 매체로 전시를 활용하고 있었던 것이다. 재일 한국인이 가장 많이 거주하고 있는 오사카에서 전시가 개최되었다는 점도 재일 한국인 학생들에게는 특별한 의미를 갖는다.

이하에서는, 필자의 한국어 및 대조언어학 수업에 수강중인 학생들이 제출한 리포트의 내용을 토대로 이번 특전이 대학의 한국어 교육에 활용된 내용과 교육 효과 등에 대해서 소개하기로 하겠다.

2 대학의 한국어²⁾ 수업과 특전의 부교재 역할

2.1 한국어 수업의 역할

학교마다 기본 방침이 다르기는 하지만 일반적으로 대학에서 전공과목이 아닌 필수 선택 및 선택과목의 한국어 수업은 정해진 교과서를 이용해 발음과 문법, 어휘를 중심으로 설명하는 수업형태로 진행된다. 이 점은 필자가 담당하고 있는 수업에도 별다른 차가 없다. 필자는 오사카 주변의 3 개의 대학³⁾에서 한국어(초급, 중급) 과 대조언어학을 강의하고 있다. 매년 수업이 시작되는 첫 주에는 오리엔테이션 시간으로 학생들에게 앞으로의 수업내용에 대해 간단히 설명을 한 후, 학생들에게 다음의 세가지에 대해서 질문을 한다.

- 1) 한국어를 선택한 이유
- 2) 한국, 한국어에 대해서 무엇을 알고있는가
- 3) 한국어 수업을 통해서 달성하고 싶은 목표

위의 질문들은 학생들의 한국어 수업에 대한 니즈를 파악하기 위한 것으로 학생들의 의향을 수업내용에 반영하기 위함이다. 이에 대한 학생들의 응답은 어느 학교나 거의 비슷한 내용이다. 우선, 한국어를 선택한 이유로 가장 많은 응답은, 일본어와 문법이 비슷해 단위 취득이 쉬울 것 같다고 답하는 ‘실리형’, 그 다음이 일본과 가장 가까운 나라 한국에 대해 알기위해서라는 ‘호기심형’, 그다음이 별다른 이유가 없다는 무관심형으로 나누어진다. 두 번째 한국, 한국어에 대해서 무엇을 알고 있는가에 대한 질문에 대해서는 ‘김치’, ‘비빔밥’ 등 이미 일본에 전해져 있는 식문화에 대한 응답이 가장 많고 그 다음으로 시사적인 내용, 즉 남북 문제나 아이티 선진국 등 일본의 언론 매체에서 자주 이슈화 되는 내용을 응답한 몇몇 학생을 제외하면 많은 학생들이 ‘모른다’ 라는 응답을 보여 대학생들의 한국에 대한 지식이 다소 편협된 점을 때번 느끼게 된다. 그러나 한국어 수업을 통해서 달성하고 싶은 목표를 묻는 세 번째 질문에 관한 응답 내용은 다른 질문에 비해 구체적이고 다양하게 나타난다. 한글을 읽고싶다. 한국 문화를 알고싶다, ‘케이 팝’(Korean-pop)의 가사를 알고 싶다. 한국에 갔을 때 한국어로 쇼핑을 하고싶다는 등 의외로 한국어 수업을 통해 한국어 뿐만이 아니라 한국 문화를 접하고자 하는 의견이 많다. 한국에 대한 지식보다는 한국에 대한 관심이 많다고 볼 수 있겠다.

단위 취득이라는 실리적인 목적과 함께, 한국에 대한 호기심을 한국어 수업을 통해 해소하고자 하는 경향이 강함을 앙케이트 내용에서 알 수 있다. 이는 한국어 수업이 학생들에게 있어서 한국어 이외의 문화를 포함한 한국의 전반적인 내용을 알리는 창구역할로 기대되고 있다는 것을 의미하기도 한다. 학생들에게 지식의 창구가 되는

교사들에게는 어학 이외의 소양이 요구되기도 하며 이러한 점으로 미루어 실제로 대학의 한국어 수업은 어학 교과서를 중심으로 하는 수업에서 해결할 수 없는 많은 과제를 지니고 있다고 할 수 있겠다.

2.2 교사를 통한 한국관의 형성

필자의 경우 매회 수업의 약 10 분정도를 어학 이외의 뉴스 기사를 통한 최근의 화제거리나 이 문화 행동양식에 대한 소개에 할애하고 있다. 이러한 언어 외적 화제는 의외로 학생들에게 많은 관심을 끄는 부분이기도 하다. 음성과 의미의 자의성을 반복을 통해 암기해야 하는 어학 수업은 자칫하면 학생들에게 권태감을 주기도 하며 단위만을 위해 수강하는 학생들에게는 무거운 부담이 되기도 한다. 언어 외적 화제가 학생들에게 관심을 끄는 것은 이러한 언어수업의 부담을 문화적 정보가 완화시켜주기 때문일 것이다. 교사들은 이와 같이 교과서 이외의 자료를 통해 한국에 대한 정보를 제공하게 되는데, 필자의 경우와는 달리, 영화나 드라마등의 영상 자료를 수업에 도입하는 경우도 있으며, 수업 레벨에 따라서는 신문이나 잡지등 활자 자료를 도입하는 경우도 있다.

학생들은 이러한 수업을 통해서 독자적인 한국관을 형성해간다. 언어 외에 한국에 대한 다른 강좌가 마련되지 않은 대학에서는 한국문화의 전반적인 부분이 어학 수업에서 기대되고 있다는 점에서 보면 학생들은 교사를 통해서 한국관을 형성해 간다고 해도 과언이 아니겠다. 특히 필자와 같이 원어민인 경우에는 그러한 기대감이 증가되는데, 실제로 원어민의 자문화 전달능력에 대한 일반적인 해석과 과다한 기대감은 스테레오 타입적인 발상이라는 것도 일반적으로 의식되기 힘든 부분이다.

수업이 어느 정도 진행되면 학생들은 언어외적 호기심을 구체적으로 나타내기 시작한다. 매 수업이 끝날 즈음 학생들로부터 질문을 받는 시간을 갖는데, 학생들의 질문 내용은 한국어 수업과 관련된 질문 외에 어학 외적 질문도 상당수를 차지한다. 그중 필자의 지식 범위와 판단에 따라 될 수 있는 한 많은 정보를 제공하고 있으나, 가끔 지식 범위 외의 내용이 요구되기도 한다. 때로는 교사의 개인적인 시각이 학생들에게는 일반화된 정보로 판단되어지는 경우도 있다. 대학에 있어서 한국어를 수강하는 학생들은 교사를 통해서 한국문화를 접하며 나름대로 한국관을 형성해 간다는 점, 교사들이 학생들에게 미치는 영향은 적지 않다.

2.3 특전의 부교재화

어학 수업임에도 불구하고 학생들이 교사에게 요구하는 정보는 어학 이외의 부분도 많이 차지한다는 점은 앞에서 설명한 바와 같다. 그러나 이에 대한 걸리큘럼상의 준비가 없는 상황에서는 교과서만으로는 만족할 만한 수업이 진행이 되기가 어렵고 부교재를 필요로 하게 된다. 부교재로 채택 되는 자료로는 각종

출판물, 영상, 사진자료등 여러 형태가 있겠으나, 이번 특전은 다각적인 면으로 한국을 알리기 위한 부교재로 채택하기에 충분한 조건을 갖추고 있었다. 우선 이동하기 편한 거리에 전시장이 위치한 점, 전시의 내용이 현대의 한국의 일면을 가치판단의 여과 없이 그대로 표현한 점, 일반 박물관 전시와는 달리 체험전시라는 점 등 외에도 식문화를 포함한 여러 이벤트가 가미된 점도 들 수 있겠다.

필자가 한국어 수업에 특전을 부 교재로 사용한 방법은 학생들에게 전시 관람 후 리포트를 작성해 제출하게 하여 단위를 취득하기 위한 점수에 리포트 점수를 반영하는 것이었다. 리포트는 전시 내용을 개략 기술함과 함께 전시를 보고 느낀 점을 평가적인 관점과 비판적인 관점을 넣어서 작성하게 했다. 이는 전시 관람과 리포트 작성이 수업의 일부분임을 학생들에게 의식하게 함과 동시에 대상을 포괄적으로 인식하게 하기 위함이다. 400 자 원고지 4 장정도의 분으로 제출 마감은 전기시험이 끝나는 7 월 말로 설정하였다. 일부 사정이 있어서 전시를 관람하지 못한 경우를 제외하고 약 240 명 분의 리포트가 제출되었다.

3 리포트에 나타난 특전의 교육적 효과

학생들로부터 회수된 리포트에는, 학생들이 전시를 보고 느낀 부분이 섬세하게 나타나 있었다. 이는, 정해진 과제를 충실히 수행하는 이 곳 학생들의 근면성과 책임감에서 비롯한 것이라고 필자는 생각하고 있다.

240 명 분의 적지 않은 수의 리포트 내용을 수 적으로 분석하여 학생들의 의견을 전체적으로 파악하는 것도 가능하겠으나, 학생들의 시각을 부분적이거나 있는 그대로 소개하는 것이 본고를 집필하는 필자의 의도와 일치하리라 생각이 들어 개별적인 내용을 그대로 소개하기로 하겠다. 이점 이하의 소개되는 내용은 240 명의 의견을 전부 반영된 것이 아닌 어디까지나 부분적인 의견임을 밝혀둔다. 전원의 의견이 반영된 내용에 관해서는 후일 다른 기회를 통해 소개하기로 하겠다.

3.1 학생들의 특전을 보는 시점

리포트에 나타난 학생들의 한국을 관찰하는 방법은 우선, 일본과 다를 것을 전제로 서로 다른 점을 찾아내려는 관람자의 기대감이 공통된다는 점이 특이하다. 그러므로 이번 특전은 학생들에게 한국과 일본은 다를 것 (다르기만 할 것) 이라는 스테레오 타입을 일소시킨 점에서 학생들의 시점과 교육 효과가 일치한다고 할 수 있겠다. 일본과 많이 다를 줄 알았는데 가 보니, 실제로는 별로 다른 점이 없었다며 유사점을 의아하게 생각하는 내용이 많았다.

이하의 학생들이 제출한 리포트 내용을 부분적으로 발췌하여 필자가 한국어로 번역한 것이다. 될 수 있는 한 학생들이 기입한 문체 등을 살려서 번역을 했으나

이해를 위해 의역을 한 부분도 많다. 리포트 작성자의 개인적인 정보는 생략하기로 하겠다.

- 1) 한국과 일본의 생활은 별로 다른 것이 없다는 것을 알았다. 아버지, 어머니의 생활, 아이들의 일상 생활이 일본과 거의 비슷하다는 것을 알게되었다.

그러나, 학생들은 일본과 한국은 비슷한 부분 (다르지 않다는 부분) 이 많음을 수용한 뒤 개별적인 부분에서 한일 양 문화의 상이점을 지적해 나간다.

- 2) 한국의 주거공간 안에 발을 들여놓으면 생활의 표정이 꽤 다르다. 그리고, 이러한 발견이 이 문화 이해와 국제 이해의 시작으로 연결된다고 생각했다.

90%이상의 학생들이 ‘가족사진’에 반응을 나타낸 점도, 공통점 안의 상이점을 지적한 내용으로 인상깊게 느껴진다.

- 3) 아파트 내의 여러 곳에 가족 사진이 걸려 있는 것을 보고 놀랐다. 이 점이 일본과 많이 다른 점이라고 생각한다. 한국사람들은 가족에 대한 생각이 일본과는 다르다고 생각했다. 한국사람들은 일본사람들보다 가족을 더 중요시한다고 생각했다.

그리고, 전시를 보는 학생들의 시각은 이하와 같이 나름대로 전시를 통해 한국을 객관적으로 수용하고 있음을 읽을 수 있다.

- 4) 이 전시를 다 보고나서 나는 뭐라고 표현할 수 없는 기분이 들었다. 적어도 지금까지 가지고 있던 한국에 대한 이미지가 변해 버렸다. 이전에는 일본과 비슷한 점도 있지만, 독자적인 문화가 강할 것이라고 생각했다. 그런데, 전시를 본 내용에 한해서 말하자면 그러한 생각은 남은 것이라고 느꼈다. 최종적으로 내가 느낀, 지금의 한국 사람들의 생활은 세 가지가 혼합되어 있다고 생각한다. 하나는 한국고유의 전통문화이다. 일본과는 다른, 향내, 선명한 색채, 김치, 쇠 젓가락 등 식생활에서도 느낄 수 있다. 또 하나는 선진국, 서양문화의 영향이다. 고층 아파트, 의정이가 다니는 학교의 컴퓨터 설비등, 젊은이들의 패션이나 god 의 음악 등은 일본이나 다른 선진국에서도 볼 수 있는 경향과 다르지 않다. 마지막으로 남은 하나는 서양의 선진국에는 없는 아시아의 한국과 일본에서 볼 수 있는 공통성이다. 젓가락, 쌀밥, 이불, 학교모양 등 헤아리자면 끝이 없다. 그 비중은 아마도, 어느것이나 균등하다고 생각한다.

위 4)의 내용은 단지 한국 문화를 일본 문화와 비교하여 상이점 유사점에 관점을

두는 전시 관람 패턴에서 나아가 한국 문화를 유형화 하여 정리 해석해 나가고 있음을 알 수 있다. 한국 고유의 개별적인 문화적 특징, 세계 전체가 선진국형으로 공통화 되어가는 과정 안에 놓여있는 지금 이순간의 한국의 변화된 모양. 아시아라는 동일 문화권에서 느끼는 일본과의 공유의식 등을 본 전시를 통해서 섬세하게 느끼고 있는 것이다. 많은 학생들이 이와 같이 전시를 관람하기 전과 후의 자신의 의식의 변화에 대해서 언급하고 있다.

3.2 의식의 변화

4) 에서도 언급된 바와 같이 이번 전시를 통해서 학생들에게 한국에 대한 인상을 변화시킨 것은 물론, 이하에서 언급하는 바와 같이 지적 호기심을 자극하게 된 것이 교과서 위주의 교실 수업에서는 얻어낼 수 없는 교육적 효과라고 할 수 있겠다.

- 5) 저는 단순히 한국을 여행해서 맛있는 한국음식을 먹고 쇼핑을 하고싶다는 이유로 한국어 수업을 수강했습니다만, 지금은 서울 스타일을 관람하고 나서 여행을 위해서가 아니라 한국의 문화를 좀더 접하고 한국을 알기 위해 한국어를 배우고 싶다고 생각하게 되었습니다.
- 6) 솔직하게 말해서, 나는 서울스타일에 가라는 말을 듣고 귀찮고 싫었지만, 단위를 따기위해 억지로 갔다. 그러나 기대하지는 않았지만, 꽤 재미있었다. 마음이 통하는 친구들과 같이 가서인지 모르겠지만, 휴일 하루를 충분히 만끽했다. 한국을 가깝게 느끼게 되었다. 고 말하면 지나친 것인지 모르겠지만 적어도 나의 흥미를 끄는 계기가 되었다. 한국어로 말 할 수 있게 되었으면 좋겠다! 이것이 나에게 있어서 솔직한 욕구이다. 영어를 배웠을 때도 프랑스어를 배웠을 때도 느끼지 못했던 지적 호기심, 욕구이다. 같이 갔던 친구들과는 한국어로 인사를 하게 되었다. 메일에도 전혀 한국어를 모르는 친구에게 코리안 프레이즈를 도입해 버린다. 일상적으로 사용하는 인사말도 자주 사용한다. 요즘은 가까운 시일내에 한국을 여행하고 싶다고 생각하고 있다.
- 7) 한국은 재미있는 나라라고 다시 생각했습니다. 음식 코너에서 먹은 닭갈비도 찹쌀튀김도 맛있었고, 언젠가 여행을 하고 싶습니다. 그리고 요전에 한국인 작가 가네시로 가즈키씨가 쓴 'GO'⁴⁾ 라는 책과 영화를 보고 많이 감동했습니다. '제일 한국인' 에 대해서도 관심을 갖고싶습니다.

위의 내용들은 전시를 통해서 학생들이 느낀 개별적인 내용이다. 전시를 관람하기 전과 후의 의식의 변화가 잘 반영이 되어있다. 5) 와 같이 여행이나 쇼핑을 위해서 한국어를 선택했지만 한국을 더 접하고 알기 위해 한국어를 배우가겠다는 사례,

6) 과 같이 단위를 따기 위해 할 수 없이 전시를 관람했으나 관람한 후 한국어에 대한 지적 호기심이 발휘되어 그후에 한국어를 적극적으로 사용하게 되는 계기가 되었다는 사례, 7) 과 같이 한국음식에 대한 단순한 체험에서 제일 한국인에 대한 관심으로까지 관심의 영역이 확대된 사례 등 계기와 내용은 틀릴지라도 전시를 통해 학생들의 한국에 대한 의식이 발전적이며 적극적으로 변화되고 있음을 알 수 있다.

3.3 실감

이번 전시의 또 다른 특징은 학생들의 거주 공간 안에서 실제의 한국의 이미지를 체험했다는 점이다. 자신들의 문화 공간내에서 다른 문화를 실제적으로 체험하는 것이 그리 흔하지 않은 기회임은 학생들도 인식하고 있는 듯 하다.

- 8) 민족학 박물관에서 현지에 가까운 한국의 문화와 생활을 접할 수 있어서 정말로 좋았다. 어쩌면 현지에서도 이렇게까지 한국인의 생활을 구석구석 까지 접할 수는 없을 지도 모른다. 실은 냉장고, 복욕탕까지 사진을 찍었다. 뭐라해도 식문화도 중요한 문화의 하나이므로, 정말로 서울 스타일을 견학할 수 있어서 즐거웠다. 새로운 호기심이 생겨났다.

많은 학생들이 이렇게까지 개인의 사생활을 전부 보여 줄 수 있을까하는 의아함과 함께 전시품들을 직접 만져보고 느낄 수 있다는 전시 방법에 대해 많은 관심을 가지고 있었다. 특히 전시품을 제공한 이원태씨 가족에 대해 놀라움을 표시하고있었다.

필자의 개인적인 견해에서도, 시각적 측면을 중시하는 종래의 박물관의 전시 형태에서, 보고 만지고, 듣고 느끼게하는 다각적인 전시였다는 점은 충분히 평가되어 마땅하다고 본다. 학생들에게 이번 전시를 적극적(강제적)으로 추천하게 된 동기도 여러 면에서 체험을 통해 느낄 수 있다는 전시내용에 있었다. 학생들에게 사전에 전시장에서는 보고 만지고 맛 보고 느낄 수 있다는 전시형태를 설명한 후 적극적으로 체험할 것을 권한 때문일까 한국음식을 맛 보거나 민족의상을 시착 하는 등 여러 체험을 한 학생 수가 많았다. 그 중 특히 냉장고에 관한 체험이 학생들에게 강렬하게 의식된 것 같다.

- 9) 냉장고 문을 열자 전원이 연결되어 있었습니다. 김치 냄새가 풍기는 전시회에 가 본 것은 처음이었습니다. 그 점에 많은 충격을 받았습니다. 보통, 다른 나라의 일상 생활을 안다는 것은 그 나라를 방문하지 않으면 안된다고 생각했습니다.

- 10) 재미있었던 것은, 선생님이 말씀하신 냉장고가 궁금해서 안을 열어봤더니, 너무 지저분해서 깜짝 놀랐습니다. 너무 있는 그대로여서 놀래기도 했지만, 아마 우리집

냉장고보다 더 지저분 할 거예요. 냄새가 심했습니다.

학생들의 강렬한 전시 체험을 있는 그대로 표현한 점이 재미있다. 9) 와 같이 특별한 전시였다는 것을 냉장고를 통해서 느낀 학생이 있는가 하면, 10) 과 같이 냄새에 대해 노골적으로 표현을 한 학생도 있었다. 필자가 수업시간 중에 냉장고를 열어보면 한국의 냄새를 느낄수 있을 것이라고 이야기한 것에 많은 학생들이 반응을 보인 것 같다. 역시, 필자가 평상시 아무런 위화감 없이 열고 닫는 냉장고의 냄새가 일본 학생들에게는 참기 어려운 한국의 냄새로 느껴지는 것일까? 냉장고를 실감했다는 것은 여러면에서 의미있는 작업이었다. 한국의 냄새를 경험함으로써 인해 일본의 냄새를 객관화 할 수 있기 때문이다. 일본은 냄새가 없는 나라임을 필자가 한국 문화를 배경으로 인식하는 과정과 비슷할 것이라는 생각이 들었다. ‘냉장고’는 한국을 실감하고 일본을 실감하는 좋은 비교 도구가 되었음에 틀림 없다.

3.4 또 하나의 시각

이번 전시는 제일 동포가 가장 많이 살고 있는 오사카에서 열렸다는 점에서도 많은 의미를 갖는다. 많은 제일 동포가 이번 전시를, 일본사람들과는 다른 관점에서 흥미를 가지고 관람 했을 것이다. 필자의 수업에도 제일 동포 학생들이 어느 정도 참가하고 있으며 이번 전시가 그들에게도 무언가를 느끼게 하는 계기를 만드는 데에 일익을 하지 않았을까 한다⁵⁾. 제일동포 사회에서는 근년에 그들의 정체성에 관한 문제가 대두되고 있다. 특히, 조국의 문화적 배경을 지닌 1 세가 줄어 세대교체가 진행되고 있는 상태에서 조국의 문화적 자극과 민족교육의 경험이 없이 성장한 젊은 세대의 정체성에 대해서는 실제로 많은 문제가 내포되어있다.

- 11) 나는 제일 한국인이다. 그 사실을 안 것은 초등학교 6 학년 때이다. 그 때까지 나는 당연히 내가 일본인이라고 생각했다. 그러나 그 사실을 알았다고 해서 그 이후의 나의 생활 스타일에 변화가 온 것은 아니다. 처음에는 다른 사람들과 다르다는 점을 남에게 이야기하고 싶어 참을 수가 없었지만, 중학교와 고등학교에 진학함에 따라 내 자신에게 한국의 피가 흐르고 있음을 계속 숨기게 되었다. 그것도 최근까지. 그건 왜 일까, 나 자신도 명확히는 알 수 없지만, 근본적인 원인의 하나로 ‘한국인을 의식 시키는 교육을 받지 않았다’ 는 것을 꼽을 수가 있겠다.

위의 리포트를 제출한 학생은 자신을 일본인이라고 생각했던 확고한 정체성이 무너짐과 동시에 자신을 숨기던 갈등의 원인을 자신이 한국인임을 의식할 수 있는 교육의 부재로 언급하고 있다. 실제로 우리 주변에서 제일 한국인이 민족을 느낄수 있는 매체로 가정과 민족학교 이외의 공간은 거의 없는 실정이며 세대교체가 이행된

가정은 이미 민족교육을 기대할 수 있는 기능을 상실했다고 봐도 과언이 아니다. 그리고 일본의 민족교육에 대한 처우문제를 생각하면 열악한 환경에서나마 민족교육을 경험한 (하는) 자 이외의 젊은 세대가 민족을 느낄 수 있는 매체가 거의 없다는 결론에 도달한다. 위의 학생의 문제는 개인적인 문제가 아닌, 재일한국인 젊은 세대 거의가 겪는 공통적인 문제인 것이다. 이러한 상황에서 이번 특전이 그들에게 한국을 느끼며 재인식 하기 위한 하나의 매체로 작용했다는 것은 커다란 의미를 갖는다.

12) 나의 할아버지는 한국에서 일본에 건너 왔기 때문에 나는 제일 한국인 3 세이다. 하지만 나의 이름은 일본명이고 언어도 생활 스타일도 일본인처럼 생활해 왔기 때문에 보통 내가 제일 한국인이라는 것을 의식하는 일은 거의 없다. 오히려 그 입장을 애매하게 하는 제일 한국인이라는 사실을 인정은 하지만, 귀찮기도 해서 지금까지 조국을 알려고 하지 않았다. 올해 조선어 수업을 선택한 것도 필요 단위를 따기 위한 이유였다. 지금까지, ‘재일 한국인’이라는 것으로 나는 일본과 한국을 필요 이상으로 서로 다른 것으로 생각해 왔다. 그러나 지금은 ‘서울 스타일’ 을 관람하고 그 생각이 조금 변했다는 생각이 든다. 사실, 각자 개별적인 문화는 서로 다르지만 특히 두 나라의 생활 스타일에 관해서 이렇게 가깝고 이렇게 비슷할까라는 생각이 들었다. 이원태씨는 ‘서로 닮은 공통점이 많아 이해하기 쉬울 것’ 이라고 말하고 있었는데 그 말 그대로였다. 이렇게 비슷한 나라에, 조국으로서일까 내가 살고있는 나라로서일까 잘 모르겠지만 친근감을 갖게 해 준 이 특별 전시는 내게 있어서 의미있는 것이었다.

위의 학생은 자신의 지금까지의 한국에 대한 무관심과 전시를 관람한 후의 의식의 변화에 대해서 언급을 하고 있다. 자신의 무관심에는 한국과 일본을 필요이상으로 서로 다르다고 판단했다는 점에 대해 언급하고 있으나 서로 다르다고 의식하는 점에 필자는 많은 의미가 함축되어 있다고 본다. 재일 한국인이 느끼는 한국과 일본의 차이점과 일본학생들이 느끼는 한국과 일본의 차이점은 본질적으로 다른 것임에 주의해야 하겠다. 즉 일본학생들의 경우 수평적인 문화 차를 의식하는 경우가 많을 것이나, 재일 한국인이 느끼는 것은 그 외에도 우열의 차가 부가된다는 것이다. 우열의 차를 생기시킨 것은 재일 한국인의 도항역사와 생활과정 및 현재의 입장을 생각해 보면 달리 설명이 필요하지 않겠다. 그러한 면에서 특전은 재일한국인들 젊은 세대들에게 1세가 이곳에 도항하던 당시의 ‘조선’ 이 아닌, 2002년의 일본과 별다름이 없는 발전된 한국으로 조국을 재인식하는 커다란 매체로 작용했음을 필자는 주목하고 싶다. 이점은, 이하와 같이 한국계 일본인에게도 같은 해석이 가능하리라고 본다.

- 13) 저는 귀화한 재일 한국인 4 세로 계속해서 일본의 학교를 다녔기 때문에 한국의 문화나 생활에 이르기까지 별로 아는 것이 없었습니다. 그렇지만, 타인과는 달리, 그냥 외국이라고도 느낄 수 없는 점, 이번 특별 전시에 많은 흥미를 가지고 있었습니다.—중략—이번 전시를 통한 귀중한 경험을 나와 한국과의 관계에서 여러면으로 유용하게 활용하고 싶습니다.

3.5 문제점은 없었는가

학생들에게 리포트를 작성할 때에 본 전시에 대해 평가적인 관점외에도 비판적인 관점을 병기할 것을 강조했지만 모두들 비판적인 의견에는 그렇게 적극적으로이지 않았다. 이는 비판적인 의견이 없었다는 것 보다는 비판하기를 꺼려하는 젊은 세대들의 신 풍조라고 판단함이 옳을 듯하다. 이하 일부이지만 공통적으로 문제점을 다룬 의견들을 소개하겠다.

- 14) 이원태씨 가족은 아마도 유복한 가정이라는 생각이 들었습니다만, 소위 저소득층의 생활도 알 수 있었으면 좋겠습니다. 일본 대학생 입장에서 말하자면 서울의 대학생(젊은이)의 생활을 더 알고 싶었습니다.
- 15) 이원태씨 가족은 한국의 그것도 서울에 있는 한 가정이라는 것을 조금 더 강조했어야 했다. 시골과 도시는 전혀 다를 것이고 도시에 따라서도 다르다. 또한, 소득과 생활 레벨에 따라서도 크게 다를 것이다.—중략—전시장의 어느 한 부분이라도 이원태씨 가족과 같은 생활을 하고 있는 사람들이 어느 정도 있으며 또 다른 생활을 하는 사람들도 있다는 설명이 있었으면 한다.
- 16) 지하에 시장이 있다고 해서 가보았다. 한국 컵라면 등 여러가지가 소개되고 있었지만, 생각보다 팔고 있는 음식의 종류가 적어서 섭섭했다. 본격적인 비빔밥, 국밥을 먹고 싶었다.

전체적으로 14), 15) 와 같은 의견이 많았다. 즉, 이번 전시에 소개된 것 처럼 현재 한국 서울에서 살고 있는 모든 사람들이 이원태씨 가족과 같은 생활을 하고 있는가에 대한 의문이다. 이는 전시에 사용된 ‘서울 스타일’이라는 명칭에서도 엿볼수 있는데, ‘스타일’이라는 용어가 관람자들에게 ‘대다수에게 공통적으로 보이는 생활 패턴’이라는 의미로 해석, 인식된 듯 하다.

학생들이 중산층과 저소득층, 시골생활자와 도시생활자 등 개별적인 생활상 중에서 이원태씨 가족이 차지하는 위치를 알고자 하는 것은 한국의 전체상을 알고자

함이기도 하다. 물론 전체상을 알고자 함은 이원태씨의 생활레벨이 전체를 대변하는 것이 아니라는 사실을 파악했다는 결론에 도달한다. 개별적인 대상이 전체에서 차지하는 위치를 알고자 하는 의견은 전시를 객관적으로 판단하고자 하는 학생들의 예리한 주문이기도 하다. 통계자료 등을 사용해 한국의 전반적인 정보를 제시해 주었으면 전시를 관람하는 이들에게 더욱 더 효과적이지 않았을까 생각한다.

16) 과 같이 한국의 식문화를 체험하고자 했을 때, 이번 전시는 기대할 만한 정보를 제공하지 못했다는 점에 대해 몇몇 학생들이 의견을 주었다. 수업이 없는 평일에 전시를 관람한 학생들중에는 평일에는 음식을 맛 보지 못해 아쉬웠다는 의견도 몇 명 있었다. 의외로 학생들이 식문화에 관심이 많다는 면을 느끼게 했다. 의외로 학생들의 식문화에 대한 기대가 컸는데, 이는 이번 전시의 자료가 모두 실제로 사용되었던 것이라는 일종의 오리지널 심리가 음식에까지 기대되었으리라는 필자의 추측이다. 즉, 전시장에 가면 이원태씨 가족이 늘상 먹던 오리지널 서울 음식을 맛 볼수 있을 것이라는 기대감이다. 16) 의 ‘본격적인 비빔밥, 국밥’은 흔히 일본의 레스토랑에서 맛 볼 수 있는 것이 아닌, 한국에서 맛 볼수 있는 오리지널을 의미하는 것이다.

학생들이 제시한 문제점 들은 어느 점에서나 금후 생산적으로 활용될 의견이라고 할 수 있겠다.

4 맺음말

이상, 이번 전시가 대학의 한국어 교육에 미친 교육적 효과에 대하여 전시를 관람한 학생들의 리포트의 내용을 중심으로 소개했다. 대학의 어학수업에 있어서 학생들과 교사의 심적 거리는 가까워야 한다고 본다. 교사들은 어학 뿐 만이 아니라 대상 언어에 대한 지리적 사회적 특징, 그 지역에 생활하는 사람들의 전통과 현대를 전해 줄 수 있는 창구 역할도 때로는 담당해야 하기 때문이다. 한국은 일본과 가장 가까운 나라임에도 불구하고 일본의 젊은이들에게 한국을 알리는 매체는 그리 다양하지 못하다. 최근에 조금씩이나마 언론 매체를 통해 한국의 대중 문화가 소개되고 있으나 양국 교류의 역사를 생각하면 결코 충분하다고는 할 수 없을 것이다.

교육은 가르치는 것 보다는 느끼게 하는 과정이라고 생각한다. 이번 전시가 학생들에게 많은 것을 느끼게 해 준 교육적으로 아주 유익한 전시였다는 점은 몇 번 강조해도 지나치지 않을 것이다. 이 점은 전시를 관람한 후의 학생들의 한국에 대한 의식의 변화와 호기심 등이 한국어 수업으로 연결되어졌다는 것에서 기대 이상의 효과를 보인 점에서도 입증될 것이다. 또한 일본 학생들보다는 항상 하나를 더 생각하며 살아가는 제일 한국인 학생들에게 또 다른 관점에서 한국과 한국어에 친근감을 느끼는

게기가 되었으리라고 본다. 앞으로도 이러한 전시 기획이 활성화 되어 교육의 현장에 유용하게 사용되기를 바라마지 않는다.

주

- 1) 2002년부터 실시된 종합교육 수업에 “2002년 서울스타일”은 한국을 알리는데 일익을 했다. 특히 다문화 공생에 관한 개념 설정이 시작되는 초등학교들에게는 더없이 좋은 자료가 되었다. 한 예로 도요나카시의 오오이케 초등학교에서는 전시를 관람한 후 학생들이 보고한 연구 발표 내용을 공개해 학부모들이 자녀들의 다문화 수용 의식을 느낄 수 있게해 주기도 했다. 학생들이 편집한 학교 신문에도 한국을 소개하는 전시내용이 자세히 취재된 점 등 초등학교들의 시각으로 본 한국 문화가 재미있게 소개되어 있었다. 같은 학교 4학년 3반(담임 가와고에 준코)에서는 같은 반의 한국 학생에게 한국어로 인사를 배워 아침 인사와 수업후 헤어질 때에 일본어와 병용해서 사용하는 등 학생들에게 긍정적인 한국관을 심어주는데 한 몫을 했다고 본다.
- 2) 한반도에서 사용되고 있는 언어에 대해 일본의 대학 및 학술적으로는 조선어라는 명칭이 일반적이다. 필자가 담당하는 대학의 과목명도 조선어로 명칭되어 있으나 이하 본고에서는 편의상 한국어로 하겠다. 근래에는 한국어라는 명칭으로 개강되거나 변경되는 대학이 늘고 있는 추세이다.
- 3) 간사이대학(關西大学), 간세이가쿠인대학(関西学院大学), 고우베쇼우인가쿠인쥬시대학(神戸松蔭女子学院大学).
- 4) 재일 한국인 작가 가네시로 가즈키의 재일 한국인 청년의 정체성에 관한 갈등과 모색을 새로운 관점으로 다룬 소설. 2000년 고우단샤(講談社)에서 출판. 쿠보즈카라는 인기 배우가 주연을 맡은 영화로도 유명하다.
- 5) 실제로 본명을 쓰지 않는 한 재일 동포 학생 수는 파악되지 않는다. 필자가 언급하는 경우는 본명을 사용하거나 필자에게 자신이 재일 동포라는 점을 알린 경우이다. 그들에 관해서는 개인적으로 동질적인 유대감과 친근감을 느끼고는 있지만 그들에게 이런 전시를 민족적인 부분을 강조하기 위한 수단으로 소개되지 않았음을 언급해 둔다. 그 점은 한국어 수업에서도 마찬가지이다.